

「国語」における探究型授業についての思い巡り

✧佐藤 透（桐蔭学園高校）

知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性などの育成が掲げられた高校の新学習指導要領が現在年次進行中です。この新学習指導要領のポイントは、いわゆる「資質・能力」を踏まえた生徒の育成にあるとされ、高校などの教育現場では、それらを育成するための手探りの模索が続いているように思います。私自身教員としての長い年月、主に高校生対象の古典の授業を担当してきましたが、例えば新しい学習指導要領の下での「言語文化」や「古典探究」の授業における多様な学習活動やその評価など、本当に現場でのご苦労は大変なことではないかということが、自分自身の経験からも容易に推察されます。そのような状況を考えた時、このシンポジウムがこのタイミングで開催されたことは大変意義深いものがあると思っています。

そうした新しい設定科目が打ち出される一方で、高校生たちの「古典離れ」「古典嫌い」ということが言われていくぶん久しくなります。大学入試という問題もあり、現実問題としてそれらの科目のめざす学習目標への道筋がなかなか見えてきづらいのも確かですが、シンポジウムのオープニングで平野先生もおっしゃっていたように今こそ、こうした時代だからこそ、自分自身を、そして社会を相対化する視点を与えてくれる古典を読む意義は増すはずだという思いを再度しっかり自分に言い聞かせながら、その方策を探りつつ、自身や現代社会への認識を深めてほしいと思いながら、授業に向き合っています。「古典っておもしろい！」って思ってもらえるチャンスだとも考えています。少し楽天的と言われるかも知れませんが、いわばピンチをチャンスに変える、そのような観点として「探究」を捉えてみてはどうかと考えています。

ここで「古典の探究学習」と言った場合、「古典を探究か、古典で探究か」という二つの方向性が考えられると思います。「古典を探究」と言った場合、その行為は古典作品そのものとの主体的な関わりによって考察するというものになり、先ずはここが「中核」になってくることは理解が得られやすいのではないのでしょうか。教材としての作品の深い読解が根底に据えられた上での資質能力育成を目指した学習デザイン—それが重要なのは言うまでもないことだと思います。その際、大学の先生方の様々な研究成果を高校の授業に落とし込むことが出来たら、生徒たちにとってより魅力的で興味深い、豊かな学び体験が出来るのではないかと常々思っています。研究の現場で問題になっていることを生徒とともに考える、そんな授業デザインがあってもいいのではないのでしょうか。

シンポジウム終了後一人の大学院生からも言われたことですが、この「古典を探究する」という観点から素材をとらえ、活用できる作品研究や実践事例を共有するプラットフォームの充実がさらに進んでいけばいいと考えています。シンポジウムに登壇された山田先生の報告にありました、コテキリの会や古典教材開発研究センターのような取り組みは、その意味でもとても大事だと思います。私もHP等でその活動を拝見し、とても刺激を受けております。このような古典を学ぶことへの興味・関心を引き出す工夫であったり、楽しく探究できるものとして開発された教材などがひろく教員に共有されると、さらに「古典を探究する」授業が広がるのではないのでしょうか。

その一方で「古典で学ぶべきことは何か」つまり「古典で探究する」ということも絶えず問い続ける必要があると思います。個人や社会にとって、古典がどういう意味で大切なのか—吉野先生のスライドに示された「古典が現在の社会や自分に関連するという理解」がいかにかに生徒一人一人の内面に形成されるか、ここが最終的にはとても重要なポイントになると思います。まさに社会人としての資質の形成を図るという意味での「古典で探究する」活動が応用&発展学習で求められるということになります。

ただ私自身の経験でもありますが、こうした活動を行おうとすると、古典世界と変わらない状況が現代にもあるという指摘で終わるケースが多いのではないのでしょうか。授業の場で古典と自分の知見とを結びつけることで考えを深め、自分や社会にとっての古典の意義や価値を探る学習まで深めることは本当に難しいと感じています。

そんな日々の中でも、時に「古典で探究」する活動に繋がる「問い」が生徒の中に生じることに遭遇することがあります。

高校三年生の四月、いつものように『源氏物語』「桐壺」巻の冒頭を授業で扱っていた時のこと、「いづれの御時にか」という書き出しにちょっとした違和感を感じたらしく、リフレクションシートに「なんかこれまで授業で接してきた作品と違う感じがします」と記した生徒がいました。この生徒の気づきに促されるように、次の授業で、「この書き出しに違和感や疑問に感じるものがあったら書き出してみて」とクラス全体に投げかけてみたところ、クラス全員からなんらかのアウトプットが寄せられ、それを私の方で整理してまとめたところ、この冒頭の一文に対して、なんと五十を超える違和感や疑問が浮かび上がってきました。

これらの中からいくつかをピックアップして、参考となる資料を提示しながら、まさに生徒と一緒に考えていくという授業展開の中で当時の宮廷社会、さらには「公」と「私」という観点での現代社会に通じる問いも派生的に生まれてきました。

ふり返ってみると、これまではややもすると私自身が熱弁をふるって説明していたところだったことに気づきました。それが生徒自身の問いがきっかけとなって、生徒たちが協働的思考を働かせながら、思考を深めていったように思います。私の拙い授業経験の中で、もしかしたら「古典で探究する」ことに少しだけ繋がったかなと思える授業展開となりました。

生徒が「問い」を立て、様々な情報を集め、他者との協働も踏まえながら、一人一人の生徒がそれぞれ自分なりの考えを構築していく、その過程を「探究活動」と考えるなら、例えば古典を対象に、どのようにすれば「古典性」を生徒自身が実感でき、そこから自己や社会に繋がる問いに発展させてられるか、その学びのあり方として「探究」の持つ意味は大きいように思います。

パフォーマンス課題や評価の問題など、「探究型学習」を進めていく上での様々な課題があるのは言うまでもありません。ただ、授業での学びを通して、生徒が自分で考え、判断できるような力を育てること、社会に関心を持つような生徒を育てることに異論はないと思います。であれば、高校の教員や大学の研究者、さらには学生、院生などがひろく協働しながら「国語」の探究型学習のあり方を、まさに主体的・対話的に作り上げていくことが何より大事なのではないかということ、シンポジウム第2部の意見交換会で改めて強く感じました。高校生の「古典探究」の授業を、時には大学の先生や院生、学生などとのコラボレーションで組み立ててみたいなど、そんなイメージを膨らませています。